



竹田 英司

私は当初、エドガー選手が怖かった。練習や試合で見せる鬼の形相に恐怖感を覚え、あまり聞いたことがないオーストラリア英語に戸惑った。

「あんたの嫁さん、イギリス人なんだって?」。しかも、これが初めての会話。私は震える声で「はい。それで妻が私にエディと英語の愛称をつけてくれました」と勇気を振り絞って答えた。エドガー選手は「よ



相手の3枚ブロックに豪快なスパイクを放つエドガー選手(右)
(5月2日の全日本男女選抜大会)



誠実なエドガー選手

ろしく頼むよ、エディ」と言い、豪快に笑った。

Vリーグ準優勝に終わり、東京で開かれた慰労会。「トムの通訳を頼む」と私はエドガー選手の横に座るよう指示された。怖かろうが仕事は仕事。私は久々に通訳業務ができてうれしかった。

「竹田さん、今から私が言うことを通訳してください」。後援会長が私の肩を軽くたたいて続けた言葉が、エドガー選手の人格を如実に物語っている。

「あなたが素晴らしいのはプレーだけではない。何よりそのフェアプレー精神だ。私はいつも感心している。あなたは自分の打ったボールが相手の頭に当たったり、近くをかすめたりすると、試合中でも相手のコートに入ってしまったら謝罪する。誰にでもできることではない。実に素晴らしい」

エドガー選手は「そういうところまで見てくださっているとは、恐縮です」と、いつになくかしこまって答えていた。私は通訳しながら、自分がエドガー選手の表面だけを見て恐れていたことを恥じた。例えばJTに入団以来、己を恥じてばかりである。
(JTマネジャー)